

日本紹介映画コンクール銀賞
(総天然色記録映画 3巻)
英、西、仏、独、露語版)

省 社 協 会
務 映 協 保 存 会
外 桜 映 協 保 存 会
企 製 協 力
協 力 文 楽 協 会
佐 渡 の ろ ま 人 形 保 存 会
大 阪 市 立 博 物 会 , 他

文 楽

BUNRAKU
—Puppet Theatre of Japan—

主な出演者 (太 夫) 竹 本 越路太夫
竹 本 津 太 夫
(三味線) 鶴 沢 寛 治
野 沢 喜 左 衛 門
(人 形) 桐 竹 紋 十 郎
(首制作) 大 江 巳 之 助

△まえがき△

近ごろは日本人でも文楽などに接する機会のない者が多くなつたが、この映画はもつとにも知らない海外の人びとに、日本の古典人形劇、とくにすぐれた文楽を紹介する目的で、製作されたものである。こういう場合、一つ戯曲をえらんで通して観せる方法もあるが、意識して場面をいろいろと変化させ、解説的にまとめている。もしも将来、日本語版が出来たら、中学生から大人までひろく日本人の教養にも役立つとおもう。

外国語版の解説のあらまし

1 艶容女舞衣・酒屋の段

若い人妻お園が、自分を捨てて行つた夫を思い、やり場のないさびしさを訴える。これは文楽の出し物の中でも有名な酒屋の、お園のクドヤで、文楽独特の見せどころ聞かせどころである。

文楽は、かぶきとともに日本が生んだ庶民的な古典芸能で、三百年の伝統をもつ。その魅力は何だろう。魂のない人形を、魂の通つたものとして完全に生かしきり、生身の人間では表現できない純粋な美を創造したこと、その生き生きとした生命感、太夫の語る淨りと人形が一体になつたところに生まれている。

場面はやがて、ドラマティックに展開する。お園は、半七の遺書を見つめる。戸外には、死の旅に出る夫の半七と愛人の三勝が、それとなく別れを告げにくる。

処女のまゝ、婚家につくす可憐な若妻を中心に、封建社会の家庭の、ゆがめられた悲しみを如実に表現し、強い感動をあたえる。

2 日本の人形芝居の発達

日本の人形芝居は長い歴史をもっている。古くは大道で人形をみせて歩いた集団があつた。それが十五世紀頃に流行した浄瑠璃と呼ばれる民衆音楽と結びついた。この風俗画は四百年前に描かれたものだが、人形芝居を唯一の娯楽としていた庶民の姿が、生き生きと描かれている。

こうした古い人形芝居は今でも、日本の各地に百近くも残っているが、とくに淡路や四国は盛んである。佐渡や北陸の山奥には、文楽以前の古い形の人形芝居も生きている。

佐渡の説教ふし人形は、四百年昔のあの画のままである。語り手は、幕のかげで三味線をひきながら、いわゆるひき語りをしている。曲の調子は、日本中世の叙事詩の語りものに近い。人形も、三人使いの文楽とは異なり、まだ一人使いである。(「熊野合戦」)

幕間には、のろま人形と呼ばれるファルスが入つて客を笑わせる。

遠く旅にいく年老いた亭主に、若い女房が、お土産に生きた地藏さんを欲しい、と無理な注文をする。生きた地藏などあるはずがないが、人のいい田舎者の亭主は都会の商人にだまされて、地藏のふりをした若い男を背負つてきた。(「生地藏」)

3 文楽の首(かしら)

文楽になると、首もすつと洗練されて、写実的なものになる。町人階級の人々を現わす人形や、武家階級の人形など。文楽は四十数種の人形のタイプを創り出した。強い意志を持ちながらどこかに愁いをたたえた中年の男。女性に愛され、果ては心中にいたる男性。豪放老かいな武士。血気盛んな若者。薄倖な女。意地悪い中年の女。廓の女。優しくみえても実は恐ろしい

女。愛きようのある庶民階級の男女。ならざるものの端役。コミカルな鼻動き。時代におしひしがれた貧しい男を、カニにみたカニ。盲目の武將など。

こういう文楽の首を制作する伝統の技術を用けついで細工人が今もいる。首は、人形使いが手にしても重くないように、軽い桐や櫨で作られる。

4 三人使いの稽古(「吃又」)

さて、文楽独特の三人使いが、どのように使われるかを見よう。主使いは、首と同時に右手も使う。左手使いは人形の左手だけを、脚使いは脚を。と、この三人の共同動作によつて、一人の人形が動かされる。

舞台ゲイコを見よう。舞台の、人形をつかうところは一段ひくくなつていて、使い手の腰から下が隠れるように工夫されている。主使いは足使いの操作を自由にするために高い足駄をはく。足使いの足拍子は、人形の感情の高ぶりを表現。三人使いで一番大切なことは、三人が呼吸をびつたり合せることだ。主使いを中心に、三人の動きが一体になるまでには長いきびしい修練がいる。

5 形の着付けと太夫の稽古

楽屋では、人形使いが自分が使う人形に心をこめて着付けをしている。人形と使い手は、こうして深い愛情で結ばれる。

若い娘の仕草、笑い、はすかしさ、よろこび、怒り、悲しみ、口惜しさ。これまた可愛らしい針仕事。

しかし、文楽の主役は、なんといっても太夫である。文楽には数多くのすぐれた戯曲がある。それを語る太夫は、日本の語りものの長い伝統の上に築かれた、力つよい独特の発声をする。この太夫を助ける三味線も、聞く人の心をつよくゆさぶる豊かな表現力をもっている。

6 一谷嫩草記・熊谷陣屋の段

文楽を代表する出し物は、なんといっても戦乱の時代を背景にした武士階級の大きな悲劇である。

熊谷直実が、敵の若大将を組みつけた手から話をしている。組みつけたのは昔仕えた主君の若君であつた。進退きわまつた熊谷は、初陣のわが子をひそかに身代りにした。

熊谷はてがら話にたくして、それとなく妻にいい聞かせる場面である。今は囚われの身の奥方も、この場にいる。

文楽は力の芸術といわれる。三味線のバチが太夫を誘い、太夫の呻吟が人形使いに力として伝わり、木偶に魂を吹きこむ。

文楽がつくりあげた美は、人間の肉体では表現できない人形独特の純粋さと、老いを知らぬ永遠の生命感をもっている。